様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：５２１０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2021
課題番号：２０Ｋ２１９５０

研究課題名（和文）哲学的概念としての「意識」の誕生の場を特定する――デカルトかマルブランシュか

研究課題名（英文）Identifying the Beginnings of "Consciousness" as a Philosophical Concept: Descartes or Malebranche?

研究代表者
田村　歩（Tamura, Ayumu）

茨城工業高等専門学校・国際創造工学科・助教

研究者番号：５０８８０１５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、17世紀の哲学者デカルトを主軸に、西洋近世において哲学的な概念としての「意識（conscientia; conscience）」がいかにして創出されたのかを究明するための端緒をなすものである。具体的には、デカルトによる〈conscientia〉という術語の使用はそれ以前の伝統的な用法から逸脱するものではないということを確認し、モンテーニュの経験概念を補助線として、デカルトの経験概念がマルブランシュの意識概念を先取りしていたことを明らかにしつつある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究を通じて、デカルトの経験主義者としての側面が強く意識された。つまり、人為的に整備された環境下で実験や観察をおこない、得られたデータを解釈するという自然科学的手法がデカルト形而上学にも採用されているという見通しが得られたのである。具体的に言えば、デカルトのコギト論・神の人性論的証明・自由意志論は、チャールズ・S・パースが科学的発見に唯一役立つものとして提唱したアブダクション（abduction）に依拠しているという見通しである。この見通しが正しければ、デカルト形而上学の自然科学的側面が明らかになると思われる。

研究成果の概要（英文）：This study is an initial step towards investigating how "consciousness" as a philosophical concept was created in the early modern Western world, focusing on the 17th Century philosopher Descartes. I confirmed that Descartes' use of the term "conscientia" does not deviate from the earlier traditional usage, and concluded that Descartes' concept of "experientia" anticipated Malebranche's concept of consciousness, with Montaigne's concept of experience as an auxiliary line.

研究分野：西洋近世哲学史

キーワード：デカルト　マルブランシュ　モンテーニュ　経験　意識

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

代表的な西洋近世哲学史研究によれば、哲学的概念としての意識が自覚的に使用されるには、17 世紀後半に活躍したデカルト主義者のマルブランシュを俟たなければならない（HATZFELD, et al., 1890）。たしかにマルブランシュは、それまで「良心［conscience］」の意で用いられていた〈コンシアンス；conscience〉というフランス語に「意識［consciousness］」の意味を付与した最初期の哲学者である。しかしこのことは、哲学的概念としての意識がマルブランシュ以前には見出されえないということを必ずしも意味しない。事実、マルブランシュに多大な影響を与えたデカルトも、フランス語のコンシアンスの語源である〈コンスキエンチア；conscientia〉というラテン語を、しばしば良心という意味では理解しえない仕方で使用しているのである（THIEL, 2011）。すなわち、デカルトが意識という概念を自覚的に確立することはなかったにしても、しかし彼のテクストの行間には、マルブランシュを先取りするような萌芽的な思索が隠されている可能性があるのだ。

２．研究の目的

本研究の目的は、西洋近世において、哲学的概念としての**意識**（羅：コンスキエンチア/仏：コンシアンス）の誕生の場を特定すること、および、その意識概念を誕生させることとなった思想的背景を明らかにすることである。さらに、この作業によって、近世以降の意識概念の発展史を方向づけ、社会科学および自然科学との横断的な発展研究を進める端緒を切り拓くことを目指す。

３．研究の方法

意識に関する従来の西洋近世哲学史研究では、〈コンスキエンチア/コンシアンス〉という術語に関する精緻な哲学史的・文献学的調査が行われ、その結果、意識概念を確立したのはマルブランシュであるという解釈が複数提示された（Lewis, 1950; Hennig, 2007）。しかし従来の研究は、当該の術語のみを俎上に上げたために、意識についてのデカルトの萌芽的な思索が当該の術語以外に込められている可能性を考慮してこなかったという欠点をもつ。

そこで本研究は、意識概念の誕生の場を特定するにあたり、〈コンスキエンチア/コンシアンス〉以外の術語をも対象としたい。具体的には、デカルトにおける「経験」（羅：experientia）という術語に着目する。なぜなら、デカルトの著作には、これら二つの術語が同義語であるかのように使用されている個所が散見されるし、さらには、「経験する」という動詞が〈コンスキエンチア〉という名詞を目的語に取ることもあるからだ。

４．研究成果

2020 年度は、研究計画に従い、デカルトによる〈conscientia〉という術語の使用はそれ以前の伝統的な用法から逸脱するものではないということを確認した。たしかにデカ

ルトの〈conscientia〉は、当時標準的であった「良心」という意味では理解しえない。しかし先行研究が指摘しているように、〈conscientia〉の語源は「共に知る」という意味のギリシャ語（シュネイデーシス）であるし、また〈conscius〉は名詞になると「目撃者」を意味する。事実デカルトは〈conscientia〉を「内的証言」と言い換えている。さらに、既存の術語を自らに固有の意味で使用する際には丁寧な定義を行うデカルトが、〈conscientia〉については定義を行わずに使用しているのである。これらの点を踏まえ本研究は、デカルトにおける〈conscientia〉とは、自らの精神のうちに生起している事態を目撃する、ないしそれについて証言するということであるという解釈を行い、そしてその点で、魂の変容を感じ取るものである「内的"感覚"」としてのマルブランシュの〈conscience〉とは異なるという見立てを得た。他方で、デカルトにおける「経験（experientia）」のうちに、マルブランシュの〈conscience〉と似通った側面がある可能性を見出した。すなわち、マルブランシュの〈conscience〉は魂の変容を感じ取るものであるが、デカルトの〈experientia〉には、精神が思考したり意志を使用したりする際に、それら非身体的な行為を自らがまさに行っていることを感じ取るという機能が見出されるのである。

2021年度は、デカルトがそれ以前の伝統とは異なり「経験」という手法を形而上学に取り入れることとなった思想的契機は何であるかを分析した。具体的には、デカルトの愛読書であったミシェル・ド・モンテーニュ『エセー』の第三巻十三章「経験について」における主張がデカルト形而上学に反映されている、という解釈を提示した（一方でモンテーニュは、医者が梅毒の治療法を知りたければ実際に罹ってみるのでなければ机上の空論が蓄積するだけであると述べており、他方でデカルトは、懐疑や思惟について知りたければ実際にそれをおこなってみればよいのであって、定義しようとすればかえって不明瞭になると述べている）。

加えて、これは立案当初の研究計画には含まれていないが、これまでの研究を通じて、デカルトの経験主義者としての側面が強く意識された。つまり、人為的に整備された環境下で実験や観察をおこない、得られたデータを解釈するという自然科学的手法が、デカルト形而上学にも採用されているという見通しが得られたのである。具体的には、「私は思惟する」という知から「私は存在する」という知が得られるのは、また、自らのうちにある「無限」や「完全性」といった観念から神の実在性を証明する人性論的証明は、のちにチャールズ・S・パースが提唱したアブダクション（abduction）に依拠しているという見通しである。アブダクションはパースが唯一科学的発見に役立つものとして提唱したものであり、もしこの見通しが正しければ、デカルト形而上学の自然科学的側面が明らかになると思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 田村歩	４．巻 29
２．論文標題 試訳：ピエール＝シルヴァン・レジス『哲学の体系』（1690年） 形而上学編第一巻：序文／第一部「存在について、および精神・物体・神・人間の本性について」第一章「自らの固有の存在をいかに確証することができるか」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 筑波哲学	６．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 Ayumu Tamura	４．巻 未定（採択決定済みだが刊行年月日未定）
２．論文標題 The Role of Experience in Descartes’ Metaphysics: Analyzing the Difference Between Intuitus, Intelligentia and Experientia	５．発行年 2024年
３．雑誌名 The Hungarian Philosophical Review (Hungarian Academy of Sciences)	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 田村歩	４．巻 online
２．論文標題 ドゥニ・カンブシュネル『デカルトはそんなこと言ってない』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Tokyo Academic Review of Books	６．最初と最後の頁 online
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 田村歩
２．発表標題 デカルトの形而上学的実験とパースのアブダクション
３．学会等名 日仏哲学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関